

2025 年 10 月 25 日

## 賤ヶ岳の戦い

あいの山の会 伊富

賤ヶ岳の戦い(しずがたけのたたかい)は、天正 11 年(1583 年)4 月、[近江国伊香郡](#)(現:[滋賀県長浜市](#))の[賤ヶ岳](#)付近で起きた[羽柴秀吉](#)と[柴田勝家](#)の戦い。

この戦いは両軍が山中に多くの砦を築き対峙し、織田勢力を二分する激しいものとなり、七本槍と呼ばれた武将の活躍で勝利した秀吉は、亡き[織田信長](#)が築き上げた権力と体制を継承し、[天下人](#)への第一歩がひらかれた。

### 合戦にいたるまで

天正 10 年 6 月 27 日、当主を失った織田家の後継者を決定する会議が[清洲城](#)で開かれ、信長の三男・[織田信孝](#)を推す柴田勝家と、嫡男・[信忠](#)の子である三法師(後の[織田秀信](#))を推す羽柴秀吉との間で激しい対立が生じた。結果的には同席した[丹羽長秀](#)・[池田恒興](#)らが三法師擁立に賛成したため勝家も譲らざるをえず、この後継者問題は形の上ではひとまず三法師で決着。

この後双方とも周囲の勢力を自らの協力体制に持ち込もうと盛んに調略を行うが、北陸の柴田側の後方にある[上杉景勝](#)や、信孝の地盤である美濃の有力部将・[稲葉一鉄](#)が、羽柴側になびくなど秀吉に有利な状況が進んだ。一方で、柴田側も土佐の[長宗我部元親](#)や紀伊の[雑賀衆](#)を取り込み、秀吉の出陣中に[和泉岸和田城](#)などに攻撃を仕掛けるなど、後方を脅かしたが、11 月一旦和睦。

しかし 12 月 2 日、秀吉は、和睦を反故にして大軍を率いて近江に出兵、[長浜城](#)を攻撃した。北陸は既に雪深かったために勝家は援軍が出せず、勝家の養子でもある城将・[柴田勝豊](#)は、わずかな日数で秀吉に降伏した。さらに秀吉の軍は美濃に進駐、稲葉一鉄などから人質を収めるとともに、12 月 20 日には[岐阜城](#)の織田信孝を降伏させた。

秀吉は一時京都に兵を退いていたが、翌月には大軍を率い攻撃を再開、滝川一益の本拠である[長島城](#)を攻撃した。

一方で越前・[北ノ庄城](#)の柴田勝家は雪のため動けなかったが、これらの情勢に耐え切れずついに 2 月末、近江に向けて出陣した。

### いよいよ合戦

3 月 12 日、[柴田勝家](#)は甥の[佐久間玄蕃允盛政](#)(さくまげんぱのじょうもりまさ)、[前田利家](#)らと共におよそ 3 万の軍勢を率いて近江国柳ヶ瀬に到着し、勝家は最後尾にあたる内中尾山([玄蕃尾城](#))に本陣を

置き、盛政勢7,000はその南西隣の行市山砦を、利家・利長親子5,000は別所山砦を築き布陣を完了させた。

18日、5万の軍勢を率いて木之本に進出した秀吉は、偵察に出向いて柴田勢の備えが堅固であることを知り、余呉湖を見下ろす周辺の山々に9つの砦を築かせて長期戦の構えをとることにして、諸将を配した後で27日に長浜城へ一旦帰還した。

4月16日、美濃岐阜城の信孝と伊勢の一益が再び挙兵したという急報があり、秀吉は北近江の指揮を弟の羽柴秀長に一任すると、17日に大垣城に入城した。

秀吉の軍勢の多くが近江から離れたのを好機と見た佐久間盛政の意見具申もあり、4月19日、盛政に大岩山砦を攻撃させた。盛政は集福寺坂から出て余呉湖の西岸を南に回り、羽柴秀長家臣桑山重晴の守る賤ヶ岳砦の下を通して尾の呂が浜に至り、そこから防備の手薄な大岩山に攻め登った。



大岩山砦は[中川清秀](#)が守っていた。重晴と(大岩山砦の付城である)岩崎山砦を守る[高山右近](#)は、より防御に適した賤ヶ岳砦で籠城するか本陣への撤退を主張したが、清秀はこれらを拒否して、彼らの再三の制止も聞かずに僅かな手勢だけで迎撃することを決意。砦を出た中川隊は猛然と盛政隊と激突、高山右近の援軍もあって一度は撃退するものの、その後は押し返され、激戦のなかで清秀は討死。

続いて、[黒田孝高](#)(くろだ よしたか通称黒田官兵衛)の部隊が盛政の攻撃を受けることとなったが、奮戦し守り抜いた。盛政はさらに岩崎山に陣取っていた[高山右近](#)を攻撃、右近も支えきれずに退却し、木ノ本の[羽柴秀長](#)の本陣に逃れた。

盛政は大岩山と岩崎山の砦を占領すると、次に羽柴秀長の本陣を攻撃しようと思ったが、賤ヶ岳砦の重晴が和議を提案してきたので、夜を待って砦から退去することを許した。

この成果を得て、勝家は盛政に撤退の命令を下したが、再三の命令にもかかわらず何故か盛政はこれに従おうとせず、前線に着陣し続けた。

一方、秀吉は、大岩山の落城の報を聞いて逆に喜び、大軍を率いて正午 14 時に大垣を出た秀吉軍は木ノ本の本陣までの 13 里(52 キロ)の距離を 5 時間で移動した([美濃大返し](#))。またこれとは別に、近江[坂本城](#)にいた丹羽長秀は 2,000 の軍勢を率いて琵琶湖を渡り、海津からすでに賤ヶ岳のふもとまで来ていて、中川・高山の敗北を知り、桑山重晴が砦を捨てたと聞いて激怒、急ぎ砦に向かって登り始めた。長秀が重晴の部隊を呼び戻すと、重晴は丹羽隊が後詰に来るとは思いもよらなかったと言って、これと合流して夜の間に賤ヶ岳砦を再び確保した。

盛政は秀吉の余りの早い帰陣に驚き、為すすべもなく羽柴軍に包囲され、孤立を恐れて両砦を放棄して真夜中に余呉湖西岸への山道を撤退し始めた。

秀吉は即座に追撃を命じたが、盛政は何とかこれを振り切って[飯浦越](#)(はんのうらごえ)にいた後詰の盛政の実弟 [柴田勝政](#)のもとに逃げ込み、勝政がそれ以上の追撃を防いだので、これに守られて撤収を進めた。

21 日朝も、佐久間盛政は秀吉らの大軍に強襲されたが、奮闘。盛政隊を直接は崩せないと判断した秀吉は

[柴田勝政](#)に攻撃対象を変更、勝政隊は大いに崩れ、勝政は討死。



賤ヶ岳から余呉湖を望む



この勝政隊を、軍を立て直した盛政が救援するかたちとなり、両軍は再び激戦となった。この時に活躍したのが、秀吉側の「賤ヶ岳七本槍」と言われている。

## 賤ヶ岳の七本槍

- **加藤清正**（かとうきよまさ）通称虎之助、尾張国愛知郡中村で永禄 5 年 6 月 24 日に生まれ、慶長 16 年の同日に死去。”生まれた日と亡くなった日が同じ“という、珍しいエピソードがある。のちに熊本藩主となり、現在も「清正公さん」と呼ばれ親しまれている。

賤ヶ岳から琵琶湖を望む

- **福島正則**（ふくしままさのり）通称市松、尾張国海東郡で生まれ、母が秀吉の叔母、実家は武士ではなく、「桶屋」の出身。血縁関係にあるため、秀吉にとっては信用のおけるかけがえのない存在でした。七本槍の中でも最強だった。
- **加藤嘉明**（かとうよしあき）通称孫六や左馬助、三河国幡豆郡で生まれ、6 歳の時に家康の家臣だった父を亡くし、馬の売買をしていた人に養われていた。寛永 8 年に死去。七本槍の中では、最も長命。
- **平野長泰**（ひらのながやす）通称権平、尾張国津島で生まれ、豊臣姓を賜るなど、一定の評価をされるものの七本槍の中で唯一、大名になれなかった。
- **脇坂安治**（わきざかやすはる）通称甚内、近江国浅井郡脇坂村で生まれ、七本槍の中では、最年長の武将で、和歌を嗜む教養人。明智光秀の与力として、「黒井城の戦い」等で功を立て、自ら頼み込んで秀吉の家臣となる。
- **糟屋武則**（かすやたけのり）播磨国で生まれ、母は戦国武将「小寺政職(こでらまさもと)」の妹、「三木合戦」で初陣を飾るなど活躍したが、七本槍」の中でも知名度が劣り、晩年は定かでない。
- **片桐且元**（かたぎりかつもと）近江国浅井郡で生まれ、通称助佐や助作、父は浅井長政の家臣で、**石田三成**兄弟と同じように、若くして秀吉に直参家臣としてつかえた。
- 「石河兵助」(戦死)と「桜井佐吉」(傷がもとで死亡)を加えた九人の武将がいたという説もある。



佐久間盛政は敗残兵を收容して再編成しようとするが、背後で茂山砦の前田利家・利長親子が戦場から離脱を始めた。利家と対峙していた秀吉の軍勢が柴田勢への攻撃に加わり、さらに柴田側の**金森長近**（かなもりながちか）、**不破勝光**（ふわなおみつ）の軍勢も退却したため、盛政の軍を撃破した秀吉の軍勢は柴田勝家本隊に殺到した。本陣からは盛政の部隊全体が総崩れになったように見え柴田軍に動揺が走った。

機を逃さず秀吉は総攻撃をかける。狐塚まで前進していた勝家は奮戦していたが、味方敗北の知らせが届き、この段階で、柴田軍の本隊はわずか 3,000 ほどになっており、数に劣り包囲されてきたので、総崩れになる前に[毛受勝照](#)(めんじゅ かつてる)に馬印を渡して脱出、北国街道を北ノ庄に逃走した。

盛政は越前山中で農民に捕えられ、勝家は北ノ庄城に逃れるも、4 月 23 日には前田利家を先鋒とする秀吉の軍勢に包囲され、翌日に夫人の[お市の方](#)らとともに自害した([北ノ庄城の戦い](#))。

## いくさの後

秀吉は盛政の勇武を高く評価していて、懐柔しようとしたが、盛政は拒否し死罪を望み、洛中引き回しの上、三条河原で処刑された。

その後、[清秀](#)を高く評価していた秀吉は、清秀の次男[秀成](#)(ひでなり)に豊後岡城(ぶんごおかじょう)を与えるとともに、盛政の姫虎姫をめとらせ、仇同士とはいえ、仲良く暮らさせたといわれている。

そしてこの合戦を機に、多くの織田氏の旧臣が秀吉に接近、臣属(しんぞく)するようになり秀吉は天下取りに大きく飛躍するのであった。

以上